

私は、古いイギリスの子ども向けのキリスト教を解説した「チョークと子供たち」という本を30年前に訳して、今はホームページに掲載していますが、その中に三位一体についての解説が書かれていて、訳していて、そのたとえの面白さに、感心したことがありました。

新しい家を前にして、三人の人が話しているたとえです。この三人はみんな、この家は私の家だと主張しているのです。

最初の人がいきました。「これは私の家だ。なぜなら、私がこの家を作ったのだから。」
すると二人目の人がいきました。「これは私の家だ。私がお金を払って買ったのだから。」
そうすると、三人目の人がいきました。「いや私の家でもある。なぜなら私がそこに住んでいるから。」

どうでしょうか。この三人が何を表すか、おわかりでしょうか。そして、この家は何を意味しているのか想像できましたか？

この家は、世界全体だと考えてもいいのですが、私たち一人ひとりの人間だと考える方がいいでしょう。家である私を作ってくれたのは、大工である神様だ、ということが先ず頭に浮かぶでしょう。天地を創造された神様は私たち一人ひとりも造ってくださったのです。

しかし、神様に作られた家である私たちは、勝手に神様から離れて、悪魔の捕虜、奴隷になってしまいました。それを神様のものになるように、買い戻してくださったのが、イエス様だ、ということになります。大工であったイエス様も、このたとえでは、家を作るのではなく、買い戻す、つまり贖い主として、十字架にかかり、悪魔に身代金を払った。だからもはや悪魔の奴隷ではない、ということです。

そして、神様のものになった私という家には、聖霊が共に住んで、私を孤独にはさせない、ということが言えるのではないかと、思います。贖いの業を終えたイエス様が天に昇られると、そのかわりに、私たちをみなしごにしないように、助け主が、聖霊として天から降って来て、私たちの中に宿られた、というわけです。

つまり、私を造り、私を救って買戻し、私と共に居て下さる神様は、父と子と聖霊である、という風に理解したらいいのではないのでしょうか。

さて、これらの神様の登場を、順番にドラマのように説明する人もいます。24年前に九州教区の通信教育で紹介したのですが、神様はご自身のことを私たちに教えるために、三幕のドラマを演じられた、と説明がありました。

第一幕は、旧約聖書です。それを通して神様はご自身が唯一の神であることを語られました。あの通信教育では、第1幕の目的は、申命記第6章の『聞け、イスラエルよ』という言葉にまとめられると、教えていました。

『4:聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。5:あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』という聖句です。

「神様はおひとりである」ということを教えるために、神様は旧約聖書という長い第1幕を演じられたという説明です。

ただ、私は少しばかり旧約を学んだ者として、もう少し付け加えたいことがあります。それは、聖書の初め。創世記第1章1節。『初めに、神は天地を創造された。』ということ。これは、最初の家の話では、神様が木工になって、家を建てた、ということにつながります。

そして、もう一つは、出エジプト記の20章の最初十戒の冒頭の言葉です。『20:1 神はこれらすべての言葉を告げられた。20:2 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。20:3 あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。』

旧約聖書には、神様がただひとりだ、ということだけではなく、自分たちを造り、またエジプトという奴隷の家から、導き出して救ってくれた、そして、掟を守るなら、共にいて祝福してくださる神様だ、という考えがユダヤ人の心には植えつけられている、ということをお忘れにはならないと思います。キリスト教では、イエス様が私たちの救い主、ということになりますが、ユダヤ教では、エジプトで奴隷だったイスラエル民族を神様がモーセたちを使って、救い出して下さった、イスラエル民族の救い主でもある、ということも、押さえておかなければならないことです。

さて、第1幕とその補足で、旧約聖書の話は終わります。

このあと、福音書という第2幕が開いて、神様のことを、イエス様がもっと具体的にご自身の言葉と行動で表してくださいました。私たちは毎週イエス様の言葉と行動を記録した福音書を読んで、神様のことを深く知ることができるようになりました。

そのことを、ヘブライ人への手紙の著者はその冒頭で語っています。

『1:神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、2:この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。』

ヘブライ人への手紙の著者は、旧約聖書の時代。つまり第1幕を、神様がモーセやそのほかの預言者たちによって、先祖たちに語られたのだが、第二幕、「この終わりの時代には」御子によって、つまりイエス様によって語られたというわけです。しかし、「この終わりの時代には」と言うので、このドラマは、2幕で終わったかのような印象を与えます。

しかし、第2幕の主人公であるイエス様ご自身は、イエス様に代わって聖霊がやってくることを語られています。ヨハネによる福音書の14章の中です。

『26:しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。』

この聖霊による歩みが、第3幕で、使徒言行録から多くの手紙やヨハネの黙示録まで続いている、というわけです。そして、それだけでなく、現在も第3幕は続いている、と考えるのが正しいと思います。今日から教会の暦も『聖霊降臨後』ということになります。現代も聖霊降臨後の時代が続いている、というわけです。でも、神様が三位一体であるということと、私たちとはどう関係があるのでしょうか？

聖書の中には、三位一体ということはどこにも書かれていません。しかし、「父と子と聖霊」という表現が一か所だけ出てきます。覚えておられますか？

マタイによる福音書の最後28章の終わりの部分です。

『あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、28:20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。』（28：19～20）

この言葉は当時の洗礼式文からの影響だろう、と考えられますが、この部分を正確に訳すと、「み名による洗礼」ではなくて「父と子と聖霊のみ名の中へと（入る）洗礼を授けなさい」となるようです。

つまり、洗礼によって私たちは三位一体の神の名の中に導き入れられるということです。ヘブライ語では、名は体を表すので、洗礼によって、私たちは三位一体の神様の交わりの中に入るのです。

そしてもう一か所紹介しましょう。三者が並列に並んでいる箇所があるのです。

コリントの信徒への手紙二の最後、13章13節です。

『13:13 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。』

これも聞いたことがあるでしょう。パウロが手紙の最後に祝福の祈りをしているのですが、この最後の部分「あなた方一同と共にあるように。」を「私たちと共にありますように。」と言い換えて、私たちは朝夕の礼拝や集まりの最後の祝祷に使っています。

結局、大切なことは、豊かな愛と恵み、そして交わりの中にある神様の三位一体の中に、私たちがとつぷりと浸ること。これが大切なのであって、一人の神様に三つの顔があるとか、造り主、贖い主、慰め主という三つを覚えるのではないのです。その深い私たちへの愛と恵みと交わりの神様が、昔も今も、そしてこれからも、私たちに働きかけ、守り導いてくださっている、ということを感じて、いつも喜んでいることが大切なんだろうと、私は思います。

今日は、三位一体主日なので、家やドラマにたとえながら考えてみました。